

名古屋などで開催中の国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」。美術館だけでなく、ビルの壁や空き店舗など街なかの空間を使った現代アートの展示が特徴の一つだ。時を同じくして、愛知県春日井市の一風変わった場所で、現代美術の展覧会が開かれている。暗く、長い空間に足を踏み入れると。

(宮川まどか)

# 廃線トンネル アートで演出

愛知・春日井で現代美術展

JR中央線定光寺駅。駅から庄内川沿いに三百ほど進むと、赤れんが造りの重厚な

トンネルが見えてくる。ここは一九〇〇年、名古屋市と岐阜県多治見市とを結んで開通

した旧国鉄中央線の上。複線電化に伴い六六年、廃線となった。光を浴びたのは二〇〇六年だ。市民の手で、全長八キロにわたって十三基のトンネルの

## 空間の意味を強調 産業遺産再生へ弾み

### 産業遺産再生へ弾み

上真善さん(六)らが目を付けたのが、現代美術だ。「トンネルの新たな魅力を呼び起こすためにも、美術家の協力を求めた」と村上さんは振り返る。

プロデューサーを任せられた名古屋芸術大の高橋綾子准教授は「トンネルそのものがアートだと感じた」と初めて見た時の印象を話す。「トンネルは暗闇の世界。でも、先には必ず光がある。日本が閉塞感に包まれた今、美術展をつく

「荒野ノヒカリ」は二十七日までの土、日曜、祝日だけ公開。有料。(事務局)電話080(9492)5458

市民が守った貴重な産業遺産と、現代美術。組み合わせの妙は今後、どんな可能性を生むのか。

半面、訪れる人の半分は六十歳代以上。「未来へ引き継ぐには若い世代にも見てほしい」と、再生委事務局長の村

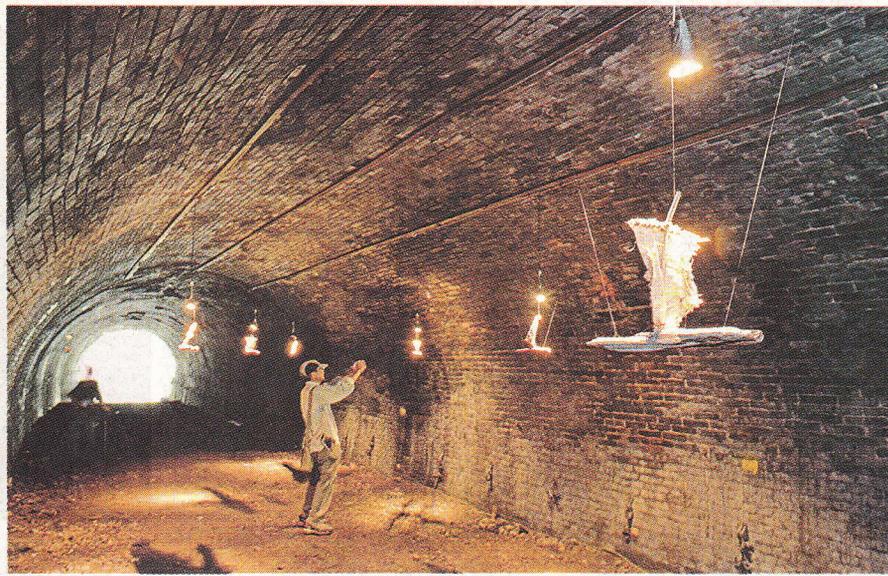
見えないSLが走り抜ける。藤本由紀夫「Room (Aigi Tunnel)」は四台の電子キーボードを使った作品。壁に反響する不協和音は、漆黒のトンネルを特別な空間に変える。そして、トンネル群の最後にあるのは、ドリアン助川「あなたへの100の言葉」だ。かこの中の紙片には、一人一人に贈る言葉が書かれている。記者には「あっちの偉そうな人より、君の方が凄いだよ」。気付

ければ、靴はすすで黒くなっている。ここをSLが走っていた、確かな証拠だ。村上さんは、あいちトリエンナーレに合わせ、三年ごと現代美術展を開く考えだ。大勢の関心を集め、現在は立ち入ることができない七、八号のトンネルを含む、現中央線の定光寺駅から次の古虎溪駅までの三・五キロを、電車に乗らずに抜けられるようにしたいという。

存在を確認し「愛岐トンネル群」と命名。そのうち、春日井市に位置する一・七キロ分、三・六号のトンネルが経済産業省の「近代化産業遺産 続33」に認定されている。今回の展覧会「荒野ノヒカリ」は、NPO法人「愛岐トンネル群保存再生委員会」(会員百十三人)が整備する、この四基が会場だ。再生委は〇八年から、春と秋の計十日間前後、四基を公開。自然を見ながらの散策が人気で、年間三万人もの来場者を集めてきた。

中に入っす。占部史人「浮寝の旅」は、砂浜で拾った流木で作った船が浮かぶ。トンネルはいわば、過去と現在を結ぶ時空の海だ。soft pad「1961」は、六一年当時の時刻表をもとに蒸気機関車(SL)の音を再現。一定の時間になると、レールを失ったトンネル内を、

そのうち七号トンネルは名古屋市の所有地にある。中は、同市の「ごみ最終処分場」である愛岐処分場用地内に建てた際に出た土砂で埋まっている。同市は「土砂の撤去や公開が前提でなく、処分場管理の一環」としながらも、十月からトンネル内部の調査を始める。



砂浜で拾った流木で作った船を浮かべた占部史人「浮寝の旅」=愛知県春日井市で

